福島支部会報 37号

日本山岳会福島支部

（令和4年1月～3月の活動）

令和４年（2022 年） ４月１５日発行

公益社団法人日本山岳会福島支部
支部長　渡 部 展 雄
事務局 〒960-8133 福島市南向台３丁目 13-9
佐 久 間　隆　夫　気 付
電　話：024-521-9561
携　帯：090-2959-4863

渡部展雄新支部長就任のご挨拶

年末大寒波と大雪、これに追い打ちをかけるようにコロナウイルス第６波、福島沖地震と続き、その収束の兆しが見えないまま令和４年度を迎えることとなりました。去る４月９日の支部総会で２期４年にわたり支部長を勤められた佐藤一夫氏からバトンを受け継ぎました渡部展雄です。

福島支部は今年 12 月に創立 75 年を迎えることになりますが、会員・友会員７０名体制のもと、諸先輩から受け継いだ伝統をよく守り、さらなる飛躍を目指す決意です。

当面の活動重点は、昨年から全国支部が取り組んできた「山岳古道 120 選」のうち①沼田・会津街道　②八十里越　③八十里越　④大峠・会津中街道　⑤万世大路　⑥山王峠　⑦太閤道(勢至堂峠)の調査に取り組みます。中・長期的には喫緊の課題というべき支部活性化と会員拡大であり、会員各位のご協力のほどよろしくお願いします。

支部活動報告（2022 年１月～３月）

支 部 共 益 事 業 報 告

事業（山行）委員会の開催

2/27(日)10:00～あだち道の駅

令和 3 年度はコロナ禍により「山の日親子登山」「フリークライミング講習会」「新年会」などの行事が相次ぎ中止となった。これを踏まえ、令和４年度支部活動を活性化させるため「事業委員会（委員長三瓶恵子)」を開催した。

「事業委員会」活動がこれまで沢登り中心の公募登山（一般参加者の会員拡大に結び付ける）に偏ったのを見直し、令和４年度は会員中心の山行を実施するため

① 事業委員会名を「山行委員会」に改める
② 県内各方部に山行計画責任者を置き、会員・友会員による月例山行等の登山を実施する
③ 県外山域の宿泊登山に取り組む

等について協議、その結果を支部総会議案として提出、支部総会で承認された。

支部山行「万世大路二ツ小屋隧道」トレック

２月 12 日(土)支部定例山行「万世大路・二ツ小屋隧道」のｽﾉｰﾄﾚｯｸを実施。年末から寒波と積雪が続き、例年より早く氷結したとの報道もあり２月８日事前調査を経て、２月 12 日、６名が参加、トンネル内の大氷柱を楽しんだ。

二ツ小屋隧道の知名度は年々アップし、県内外からの登山者も多く、その影響からか国道工事事務所では入山口の駐車場の使用を禁止とした。前日の２月１１日にはトンネル内で転倒受傷事故（救急車搬送）も発生している。同所は気温急変による氷柱崩落が重大事故につながるおそれもあり、万全の装備、準備で訪れることを痛感した。

万世大路は、日本山岳会創立 120 周年記念事業「山岳古道 120 選」対象古道であり、明治 14 年、時の福島県令三島通庸が開削した。同年 10 月、明治天皇の東北・北海道巡行時に開通式を挙行した際、明治天皇が「萬世ノ永キニ渡リ人々ニ愛サレル道トナレ」という願いを込めて「**萬世大路**」と命名、地元有志による整備も進んでいる。

二ツ小屋隧道入口左から佐藤一夫、清野義美、小林正彦、渡邉尋元
佐久間隆夫、渡部(展)　下の画像はマンネリ化？　事故の跡(血痕)も

只見川を 300 日撮る男「星賢孝」の紹介

３月初旬、朝日新聞福島版に日本山岳会々員星賢孝氏の特集記事「霧幻鉄道-只見線を 300 日撮る男(監督・安孫子亘)」が掲載されていましたので紹介します。

星賢孝氏は、長年にわたり故郷只見川流域の豊かな自然を世界に、全国へと発信し、災害で流出した只見線の復興と過疎化に悩む地域おこしに取り組んで来られました。

本年 10 月に寸断された只見線復旧の原動力は、星氏の活動が国や県を動かしたと言って良いと思います。

支部会報で何度か紹介しましたが、ネット検索「星賢孝　Facebook」クリックで閲覧できます。

JR 只見線第 2 橋梁を渡る列車

「六十里越 国道」あいよし橋の流出事故

３月４日（福島県報道３月７日）国道 25２号線新潟と福島の県境の「あいよし橋」が流出した。浅草岳方面の斜面から記録的な大雪なだれ落ちたもので、復旧の見込みは不明。写真は福島県ホームページからの画

雪解けを待って復旧工事に入り、当面は崩落を免れた旧あいよし橋を通行させて対処することとなった。

雪崩で崩壊したあいよし橋　赤線部分

山岳古道調査 120 選の「六十里越」は流出したあいよし橋からさらに上の部分に開削された古道であり、6 月から調査再開の「八十里越」とともに早い復旧が望まれる。

下の画像は、大雪の只見町（鈴木章一会員提供・3 月 7 日撮影）

雪景色の只見町積雪は 2 メートル以上

支 部 員 個 人 山 行

以下 4 か所はいずれも佐久間隆夫会員の個人山行です。

1･23(日) 二ツ箭山登山

二ツ箭山(710m)は沢登り、岩登り、尾根歩きが魅力の浜通り南部の名峰。 1 月 23 日(日)09:30 山友 3 人と根本登山口から登山開始。 登山口から 15 分、分岐沢コースから御滝(10m)鎖場、数段滝を越え沢のへつり、鉄の足場、〆帳場を過ぎ、斜度 60 度 40m の鎖場、10:50 息つく間もなく垂直の男体山(20m)に取り付く。

チムニー状のルンゼから 11:30 女体山(15m)、12:30 山頂を踏み、長い月山尾根を二ツ箭山の名岩峰を眺めながら 13:45 登山口に戻る。実に楽しい山行であった。

いわき市の名峰二ツ箭山

2･10(金)箕輪山ｽﾉｰﾄﾚｯｸ

安達太良連峰の知られざる樹氷群

蔵王、八甲田、吾妻山のようにシラビソ系針葉樹の少ない安達太良連峰に、珍しい樹氷エリアがある。場所は鉄山～箕輪山の鞍部から西側にそれた場所。そこに樹氷の幻想的世界が広がる。

２月 10 日、箕輪スキー場リフト最終駅からｽﾉｰｼｭｰで～箕輪山頂～鉄山、安達太良山への縦走ルートを歩く。

天気が良ければ箕輪山までは約１時間、そこから樹氷群が確認できる。旦高森川源頭部に沿って鉄山避難小屋へ向かい、樹氷エリアから鉄山山頂までは平らな雪原を 1 時間程度。矢筈森～安達太良山～和尚山の雪稜と爆裂火口の絶景は見逃せない。帰路は、箕輪スキー場 A リフト上部～スキー場内のブナ林～スキー場駐車場到着。

以下画像添付。

3･12 雄国沼雄子沢コース トレック

雄国山(1,271m)は、雄国沼カルデラの北西に聳える猫魔火山外輪山の最高峰。夏は咲き乱れるニッコウキスゲなど雄国沼は花の世界。冬、沼は雪原と化し天空の雪稜となる。

今回は山頂付近までガスがかかっていたので、雄国山山頂をあきらめ、隣の 1,236m ピークまでの往復とした。

08:30　雄子沢登山口駐車場出発(雄子沢積雪２m)

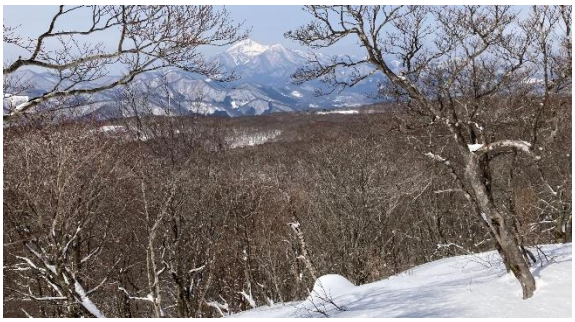
08:45　休憩舎と雄国山分岐～9:30　雄国山頂上稜線～雄国山鞍部)着～10:00　1,236m ピーク到着。昼食後 11:40　下山開始～12:50　登山口駐車場着

写真上から雄子沢　中段右原生林　左雄国沼休憩所
下段 1,236m ピークら俯瞰した雄国沼の冬景色

3･25 母成峠･杉田林スノートレック

3 月 25 日(金) 8:00　母成峠駐車場出発～9:20　銚子ヶ滝分岐通過～10:30　ブナ原生林。 11:00　150m の急登に挑む。12:00 森林限界通過したところで昼食。13;00 下山開始。15;33 母成峠駐車所着。

登山開始から銚子が滝分岐までは雑木林とカラ松帯が続き 1,300m から上部は広々としたブナ巨木原生林帯。さらに 150m の急登を過ぎるとシラビソ帯。暫く緩斜面が続き、森林限界となる。眼前に船明神山が迫り山頂までは 40 分の登り。昼飯としたその時、突如震度 6 の地震に見舞われた。ハプニングは別としてブナ原生林の素晴らしさを堪能。



事務局からのお知らせ

1　支部総会の開催

令和 4 年度日本山岳会福島支部総会は、去る 4 月 9 日(土)会員 19 名出席のもと開催。活動方針、新役員選出など提出議案は全会一致承認された。～詳細議案書の通り

2　支部新役員体制について

佐藤一夫前支部長が今次支部総会で後進に道を譲ったことを受け、新役員・事務局体制を強化するとの命題は難航、先送りとなった。今後とも組織拡大と支部活動の充実強化のため支部員、友会員一層のご協力をお願いします。

3　今後の支部事業計画と重点的取り組み

令和 4 年度は「山岳古道調査」を重点として、２年間続いたコロナ禍で低迷した本来の活動を取り戻すことにします。

古道調査は５月から本格的な調査に入りますが、一人でも多くの会員参加を！

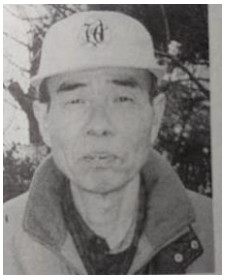
4　新入会員(友会員)の紹介

3 月 26 日付で入会が承認された鈴木睦(40 歳代)さんを紹介します。

鈴木さんはいわき市在住で、昨年秋の支部主催「霊山登山」に初参加されこれを機に入会されました。今後のご活躍を期待します

5　会員訃報

二本松市在住の大友 繁会員(89 歳)は、3 月 27 日逝去されました。心からご冥福をお祈りします



大友繁会員のこれまでの活動紹介
会員番号：9,369　89 歳
会員歴 38 年（1983 年入会）
住所：二本松市若宮 1-129。

安達太良山岳会に所属、平成 17 年に日本山岳会が創立 100 周年記念事業として取り組んだ「分水嶺登山」に参加するなど精力的に支部活動に参加した。

ＪＡＣ福島支部アーカイブス

「墜ちるなら富山県側へ」。山男たちにひそかに語られてきた言葉。27年前の平成6年9月下旬、谷口隊長率いる富山県警山岳警備隊の活動拠点立山で開催の「山岳遭難救助訓練」に参加した体験記「その2」です。　渡部展雄　記

文部省登山研修所人工岩壁前での記念撮影
前列左５人が富山県警隊員、前列右２人が長野県警山岳警備隊員で３人目が谷口隊長。２列目以降は各県警参加者

～支部会報第 36 号からのつづき～

絹子さんは、春から秋にかけ室堂の「自然保護センター」に勤務し、山岳警備隊員や国、県の職員など宿泊者の面倒を見てくれる。半面、若い警備隊員には容赦なくきびしい。 何年か前の富山県警本部長慰問の際には、上履きに履き替えないまま上がり込んだのを見て怒鳴りつけた武勇伝もある。

冬は馬場島(ばんばじま)警備派出所の管理人として、隊員たちの厳しい救助活動を支えている。研修終了後の2日間、私的に立山～五色が原周辺を歩き回ったが、実はやさしい独身のお姐さん？でもあった。心のこもった食事やお弁当、呼び捨てにしていた副隊長の言い分はほとんど受け入れてくれた。

このほか山小屋の主人、従業員、アルペンルートの人々など、日ごろから警備隊の活動を積極的に支援してくれる多くの方々が研修生を温かく迎えてくれたのである。

ピッ ケルを持ったお巡りさん

研修前半の4日間は、文登研近くの雑穀谷岩場における岩壁登撃と遭難者救助、後半の 3日間は、立山・剣岳一帯での縦走訓練と遭難者のボッカ搬送とに分け実施された。研修生5～6人に担当教官1名付き、訓練は最終日まで担当教官に一任され、すべて教官ペースで進められることになった。 訓練の総指揮をとったのは谷口隊長で、各班の指導は椙田副隊長以下富山県警5人と長野県警2人の計7人が当たった。いずれ劣らぬ猛者揃い。これまで厳冬期あるいは岩壁で幾多の修羅場をくぐってこられた人たちである。

富山県警山岳警備隊は総勢 31人の隊員を擁し、全国に例のない通年常駐体制を取っている。人は隊員のことを「ピッケルを持ったお巡りさん」とも呼ぶ。発足当初は「乞食分隊」と陰口をたたかれながら、ひたすら救助活動に取り組み、今や押しも押されぬ日本一の隊になった。途中、現役隊員の殉職といった悲しみを乗り越え、警棒をピッケルに持ち替えた警察官が山で遭難死した人たちの鎮魂の想いと安全登山の願いを込めた活動記録を持ち寄り一冊の本とした。この本は若かった頃の私自身には強烈であった。

初日の開講式で谷口隊長以下8人の教官をひと目見たとき身震いしたことを覚えている。研修を重ねるにしたがい、教官達の人となりが見えてくる。その日の訓練を終え、酒をすすりながら出る話は担当教官のことだけ。研修生の誰もが日に日に畏敬の念を抱き、山の警察官に対する素晴らしさを肌で感じ取ったのである。そこで研修中のエピソードを交えながら谷口隊長以下担当教官の方々を紹介してみる。

○富山県警山岳警備隊長　谷口（たにぐち）　凱夫（かつお）(56歳)

警視、県警本部地域課次席を兼務。隊員から「おかみ」と畏れられている。研修中某隊員が「私らはおかみに逆う訳にはいきません」と漏らしたことがあった。隊発足前からこの仕事に携わり、出会った隊員すべての人が「 すごい人ですから」と語ってくれたその裏には、とくに対外的な交渉の面、自衛隊小松基地の大型ヘリ出動とか、遭難者救護を受け持つ医師会、山小屋関係者、アルペンルートの人々など救助活動に係わりを持つすべての人々から絶大な信頼を受けているという姿がある。これらの人たちは、隊長個人にではなく、「隊」そのものに協力してくれているという。新人隊員であってもひと度動けば、隊長とか誰かれの区別なく対等だという協力関係と隊風を築き上げ、それが伝統となって脈々と受け継がれているのだ。隊全体の意気は高く、隊長を慕って全国から山好きの成年が集ってくるほどだ。骨太の体に隊服が一段と似合う文人でもある。

○ 同副隊長　椙田（すぎたただし）　正警部補(47歳)

県本部地域課所属。スマートでハンサム。 隊長同様、隊設立時からこの仕事に係わり、自然保護センター・ 絹子様に呼び捨てにされていることは前記のとおり。本人も絹子さんにはなぜか反論せず、飄々としていて隊のまとめ役には ビッタリ。今回は登山経験のない7班5人を担当。

雑穀谷での訓練風景

○ 同分隊長　巡査部長　清水正雄(42歳)

隊歴25年のベテランで、署の地域課に勤務。私達2班6人の面倒を見てくれた。鍛えられた身体。 牛のようにやさしい目をして寡黙ながら担がせたら今でも隊一番で、トライアスロンにも挑戦しているとか。雪も岩もこなすオールラウンドプレーヤーで「 慣れが一番恐い」と口ぐせのように言ってくれた。たぶん同年代の救助隊員(郷さん)を二重遭難事故で死なせてしまったことを慮っての言葉か。私たちは清水さんから登山技術ばかりでなく、人にやさしく接することの大切さを学び取った。詳しくは後述の「訓練日記」で述べる。

○ 隊員　巡査長　横山　隆(33 歳)

千葉県出身、小柄でクール、岩登りが得意。 研修生の中で最も練度の高い1班6人を担当。 訓練中、岩壁上部に水平に生えている木に仰向けに寝転び休んでいる姿を見かけた。大雨ショボ降るなか、隊服を着用せず、トライアスロンでもらった帽子を目深にかぶり、岩場でも普通の運動靴でスイスイ。どこから見ても地域警察官には見えない。山岳警備隊になるため下総の国から越中にやってきたという横山さん。一緒にいると不思議に高さに対する恐怖心が薄れてくるのがわかる。何が起こっても「大丈夫じやろがー」が口癖。百メートルの岩壁上で研修生がギャーという悲鳴を発しても動じない。稜線を風のように走り抜けた不思議な人。～ 以下次号～